

## 「草枕」に想ふこと

日本病院薬剤師会理事  
滋賀医科大学医学部附属病院教授・薬剤部長  
寺田 智祐 Tomohiro TERADA



「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。」これは、夏目漱石の初期の名作の1つである、『草枕』の冒頭の部分である<sup>1)</sup>。他人との交渉ごとや、組織のマネジメントをとっさに思い浮かべてしまうが、小説では以下のように続く。「住みにくさが高じると、安いところへ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟ったとき、詩が生れて、画ができる。～中略～、住みにくいところをどれほどか、寛容で、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職ができて、ここに画家という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊とい。」この世は住みにくいという問題提起から、芸術家は尊いという結論を導き出している。ロジック的にはかなり無茶だと思うのだが、『草枕』の小説自体、漱石の芸術論の様相を呈しており、冒頭から作家（芸術家）としての矜持が垣間見える。

この原稿を書いている時期は、1月の後半で、診療報酬改定の話も盛り上がり始めている。重点課題Iとして、従来の「地域包括ケア」に関する項目が、「医師等の働き方改革の推進」に関する項目に変更になったことが大きな特徴であろうか。そのなかでも、I-3「タスク・シェアリング/タスク・シフティングのためのチーム医療等の推進」が、我々薬剤師の将来を占う重要な項目である。四病院団体協議会も、医師のタスク・シフト/タスク・シェアに関する要望書を、厚生労働省医政局に2019年度中に二度にわたって提出している。薬剤師に関する要望は、2010年4月30日に発出された医政局長通知（医政発0430第1号）の「薬剤の種類、投与量、投与方法、投与期間等の変更や検査のオーダについて、医師・薬剤師等により事前に作成・合意されたプロトコルに基づき、専門的知見の活用を通じて、医師等と協働して実施すること」と変わりはなく、全職種のなかで一番最初に取り上げられており、大きな期待の表れと感ぜられる。日本病院薬剤師会では、上記の医師との協働作業をProtocol Based Pharmacotherapy Management (PBPM) と定義して、これまでに「PBPMの円滑な進め方と具体的実践事例 (Ver.1.0)」を作成するなど啓発活動を進めてきた。PBPMの実践はタスク・シフト/タスク・シェアに大きく寄与できると考えられるが、現状では、診療報酬に大きな影響を与えるほど、全国津々浦々で普及しているとは言い難い。

チーム医療のラウンドをしながら、こう考えた。先に動けば責任が伴う。協働すれば手続きが煩雑だ。一人で無理すれば空回りする。——とかくにPBPMはやりにくい。できない（やらない）言い訳は山ほどできる。川淵三郎氏は、Jリーグの準備検討委員会で、以下のような発言をし、サッカーのプロ化に関する否定的な流れを一気に変えたと言われている<sup>2)</sup>。「時期尚早と言う人間は100年経っても時期尚早と言う。前例がないと言う人間は200年経っても前例がないと言う。自らの仕事に誇りと責任をもてない人間は、次から次へとできない理由ばかり探し出してくる。仕事というものは、できないことにチャレンジをして、できるようにしてみせることを言うんだ。」

人間の思考は、時代を経ても変わらない。薬剤師としての誇りをもって、また時代の期待に応えるべく、新しい世界を切り開いていきたいものだ。

1) 夏目漱石:「草枕」,新潮社,東京。

2) 伊佐山建志・二宮清純・滝野隆浩:「現場を動かすリーダー力」,自由国民社,東京。